



特集

# 南極観測隊

地域医療から極地へ



①



④



②



③



①見渡す限りの大雪原とペンギン ②③南極観測船「しらせ」。厚さ1.5mの氷を連続砕氷できる世界屈指の砕氷船 ④南極観測隊として活動中の小田さん

日本の南極観測の中心「昭和基地」。管理棟、観測棟、居住棟など約60棟の施設がある。夏期間には夏隊・越冬隊合わせて約100人が活動している



さて、小田さんはなぜ南極を目指したのでしょうか？

そもそも南極に興味を持ったのは、小学生の時に図鑑で南極の特集ページを見たのがきっかけでした。その後、大学の進路を決めるときに医学部か理学部か最後まで悩んだというほど、南極への強い思いを持ち続けていたようです。最終的に選んだのは医師の道でしたが、病院勤務をしているときに一つのニュースが小田さんの心を捉え

中学校での救命処置講習の実施などにも取り組んできました。

小田さんは、神栖で勤務していたときの思い出を次のように述べています。「決して人手は多くありませんでしたが、重症患者が救急外来にいるときに、どこからともなく病院の仲間が集まってきて助けてくれるのがうれしかったですね。みんなが、地域のために」と同じベクトルで働けたことは大変貴重な経験でした」

地域に寄り添い、私たちの命と健康を守るために活躍していた小田さんが、今は約1万4000キロ離れた南極にいます。南極は、地球の南の果てにある氷の大陸。地球儀でいうと、ちょうど底にあたる部分です。世界各国が観測拠点を置いており、日本は1957年(昭和32年)に昭和基地を開設しました。世界の気象観測網の拠点にもなっている重要な施設です。

## なぜ南極を目指したのか？

毎年、心新たに迎えるお正月。国や地域によって風習は違っても、「今年が良い年になりますように」という願いは同じです。ところで皆さんは、お正月をどこで過ごしていますか？

実は神栖市の救急医療を担っていた医師が、日本から遠く離れた南極で今年のお正月を迎えています。それは、神栖済生会病院に勤務していた小田有哉さんです。

小田さんは、なめがた地域医療セ

ンターに勤務していたときに神栖市の医師不足を知り、2021年に神栖済生会病院に着任。救急医療の分野で地域のために役立ちたいという強い思いを持って、交通外傷や労働災害によるけがなどをした患者さんの治療にあたってきました。できるだけ断らずに救急搬送を受け入れるよう力を尽くした結果、救急車の平均搬送時間が短縮したり、病院の応需率が上がったりますなど、地域医療に貢献しました。さらに、地域とのつながりを大切にしており、市内

## とある医師の特別なお正月

長い人では約1年3カ月にわたって南極に滞在し、さまざまな観測や研究をする南極観測隊。神栖済生会病院に勤務していた医師が、医療隊員として活動中です。仕事や暮らし、神栖市の子どもたちへ伝えたいことなど、南極から届いたメッセージを紹介します。



約14,000km先の海の向こうに南極がある



神栖済生会病院(左)と同病院で勤務していた当時の小田医師(右)